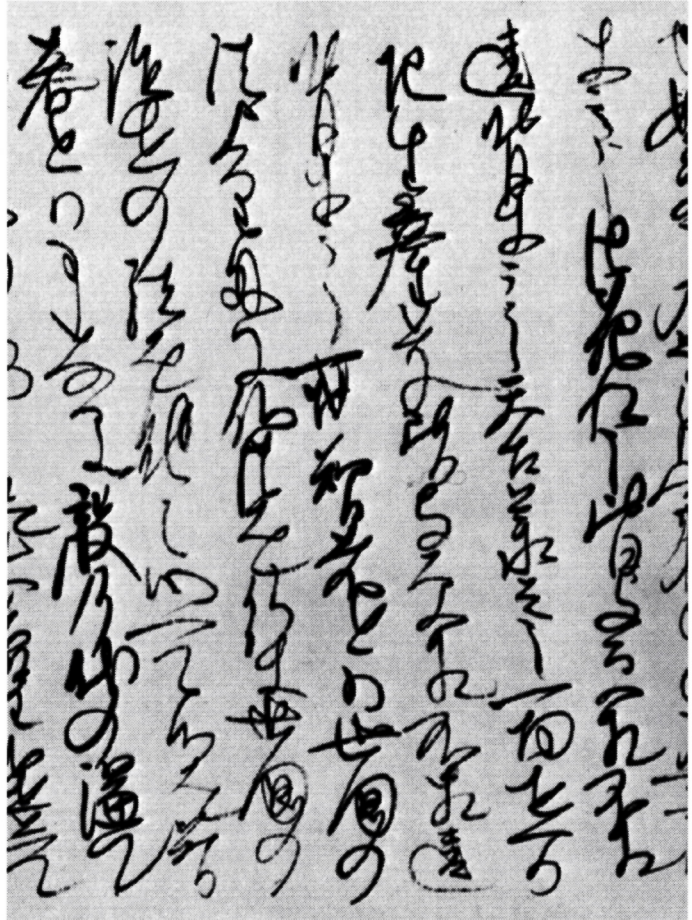




今月の御聖訓



【一等云云。】法華經に云く「皆実相と相」

（違背せず）等云云。天台之れを承けて云く「一切世間の、
違背一等云云。天台承レテ之レヲ云ク、一切世間、

（治生産業は、皆実相と相違）
治生産業ハ、皆与ニ実相ト不ニ相違

（背一七等云云。智者とは世間の）
背せず」等云云。智者とは世間のの

法より外に仏法を行せず。世間の

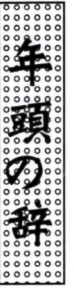
治世の法を能クタク心へて候を、智

者とは申スなり。【般の代の濁りて】

【滅劫御書 全集一四六六頁】

目 次

今月の御聖訓	
年頭の辞	菅野憲道 1
お講【義語】「受持と境智冥合」	菅野憲道 2
年頭にあって	森 秀之 9
「興風談所の研究成果(十六)」	菅原関道 10
【御速夜講演】「御書中に見える、『米』について」	藤村道監 14
【義語】	20
一月の行事 睦月詠草 恵日俳壇 訃報	



謹賀新年 菅野憲道



令和五年あけましておめでとうございます。

過ぎしこの三年は、コロナ感染症やロシアによるウクライナ侵略戦争等が、世界規模で混乱と不安をもたらし、我々の日常生活にも大きな影をもたらしてきました。この現実には新しい年を迎えても解消できる見込みは無いようです。むしろ新たな災厄によって、より困難な状況が起こる想定もしておいたほうが賢明かと思えます。戦後七十数年にわたって続いた平和で豊かな社会は、地勢や時運に恵まれたことが大きいのですが、人々は慣れと憍恣の心を生じ、今の社会環境や健康、人間関係や経済などいつまでも続くものだと錯覚し、努力を忘れていよいよ放逸になります。

信心修行も同じです。寿量品に「もし仏が久しく世に住せば、薄徳の人は善根を種えず、貧窮下賤にして、五欲に貪著し、憶想妄見の網の中に入りなん」とあります。また、俗に好事魔多しともいいますが、日々平穩で、なに事も順調にいくほど信心を忘れるものです。いつでもお参りできるとか、用事があるからなどと怠っていると、いざという時にはお題目を唱えることも忘れ、貧窮下賤の心になって自分のいたらなさを他のせいになかぬません。大聖人も「一生空しく過ごして万歳悔ゆること勿かれ」と仰せられております。

せっかく縁あって法華経の信心に出会いながら、信心薄くしては宝の山に入って空手で帰るようなものです。お講の参詣はご本尊・大聖人・故父母への最低限の報恩の証しではないでしょうか。

ともどもに励ましあって今年是一段と「不染世間法 如蓮華在水」の信心を磨きたいものです。

お講講話(要旨)

拝読御書 「曾谷殿御返事」 (全集一〇五五頁)

受持と境智冥合

菅野 憲道

《境と智とは》

本日は、「曾谷殿御返事」を通して我われの成仏(といつても成仏の意味も難しいのですが)に至るための道筋として、境智冥合という概念についてお話したいと思います。

「境智冥合」(きょうちのみようごう)という言葉は、毎日の勤行の觀念文になっておりますから御存知かと思いますが、では、境智冥合とはどういうことかと問われれば、一般的な理解として、仏壇に安置してある御本尊様(境)に向かい合掌・唱題することによって、我われの一念が御本尊様と一致して、「境智不二」といって、まったく南無妙法蓮華經の法界と一体化すること、いいかえれば認識の主体と客体が不二となって仏の悟られた境界と同じになるといような理解ではないでしょうか。これについて日寛上人は、境智冥合を「依義判文抄」において

「夫れ本尊とは所縁の境なり、境能く智を発し、智亦行を導く、故に境若し正しからざる則んば智行も亦随つて正しか

らず。妙樂大師(弘決)謂えること有り、仮使発心真実ならざる者も正境に縁すれば功德猶お多し、若し正境に非ざれば縦い妄偽なけれども亦種と成らず等云々。」とあります。

またこれにはよく「函蓋相応」という譬喩が用いられます。すなわち函の身と蓋がピッタリ合つて、一体となつてはじめてものの用に役立つように、境と智が一如不二の関係となつてこそ成仏が叶うので、これが四角の函に六角の蓋とか、大きな函に小さな蓋では役に立ちません。

《受持ということ》

ところで話ばかりですが、かつて阿部日顕師が、創価学会の数々の謗法を擁護するあまりに、「末法において、御本尊を受持しておられる方においては、基本的に謗法はない」といつて、末寺の住職方が学会の謗法を改めさせようとした運動を禁止し、言論統制したことがあります。その理由がこれで、創価学会員がお光りさんのようなものを拝んでいるわけではなく、

本宗の寺院から下付した御本尊を拜んでいるのだから謗法はないと断言し、池田大作元会長の復権を手助けしたものでした。

これは受持という意味を間違つて理解していたのです。本宗では受持正行といつて妙法蓮華經を一念に受持することが正しい修行のあり方なのですが、創価学会の折伏闘争が激しく行われた頃、半ば強引にでもお寺に連れて行つて御授戒を受けさせ、同時に御形木御本尊の下付を受けさせ、その証をもつて折伏成果として地方本部に報告する手順だったため、妙法蓮華經を受持するという意味が、御形木御本尊の下付を受けて安置している意味になつたのです。

しかし中には嫌がる人を無理に連れて来たり、義理や利益誘導で受ける人もおりましたから、心と身体は別々で、とても御受戒文の「今身より仏身に至るまで……法華本門の本尊と戒壇と題目を持ち奉るや否や。持ち奉ります」とはいえない例が多々ありました。要するに折伏所帯数を競う行き過ぎた成果主義だったことから、精神的、内面的な信不信の内実について省みることがなほおざりにされてしまったのです。したがつて御本尊の受持ということも心の問題では無く即物的なとらえかた、世俗の数量の次元に変化してしまつたのです。

本来の受持とは「信ずる故に受け、念ずる故に持つ」といつて、「心こそ大切」な、きわめて精神的な営為であつて、御授戒の時に「持ち奉る」と誓うように内得信仰の方でも受持できます。それとは逆に御形木御本尊を授与して頂いてお祀りしていても受持していない人、すなわち信心のない人もおります。

ですから「御本尊を受持しておられる方においては基本的に

謗法はない」などとよくぞ広言したものです。御形木御本尊の所有、所持という意味に誤解して、肝心の「一心に妙法蓮華經を受持する」という信心修行の上でもつとも基本となる意味を、忘れたのか、誤解したのか知りませんが、皮相的なとらえかたに終始していたのです。宗祖は『観心本尊抄』に、

「釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華經の五字に具足す。我等此の五字を受持すれば、自然に彼の因果の功徳を譲り与へたまふ」

とあつて、御本尊の受持も「五字を受持する」も同じ妙法蓮華經の信念受持の意味で用いられ、この受持行こそ修行の要とされております。紙幅の御本尊や板御本尊の色形面だけを指して本尊と思ひ、信心の有無、厚薄について、そのありようを問わないのであれば仏道に入ることはおぼつかないでしょう。このことは、『日女御前御返事』の、

「此の御本尊全く余所に求むる事なかれ。只我等衆生、法華經を持ちて南無妙法蓮華經と唱ふる胸中の肉団におはしますなり。」

との御書や、

「此の御本尊も只信心の二字にをさまれり。以信得入」とは是れなり。」

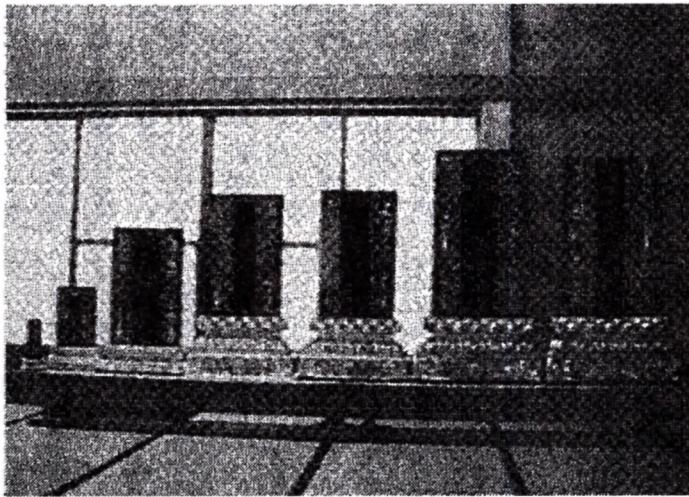
などの御書にも違背した阿部師の己義、我見なのです。

もともと創価学会における広宣流布という意味は、池田大作を盟主と仰いで天下取りの野望を実現することですが、総体革命ともいつて、宗教活動で得た熱狂エネルギーを転じて政界・経済界・教育界・芸能界など多方面に進出して勢力を植えつけ、

やがて時が熟すれば池田大作の元に結束し、日本の権力支配をもめざそうとするものです。学会首脳の本質は思想的にも戦略的にも宗教とは異質の権力主義者であり、その組織形態は宗教・政党・大学・マスコミ・商社等の複合的企業連合でもありません。広宣流布の合い言葉はいつのまにか学会の勢力拡大と同意語となり、大幹部にとっては自己の利益と直結し、地位向上や名聞名利を実現する隠れ蓑でもあったのです。かくして会員の信仰心を利用し、選挙、建築物、イベント、大集会などの大衆動員を通じて、帰属意識を高めてこれを組織化して政治権力や財力の源泉にしてきたのです。

昭和五十二年の頃から宗門支配か、さもなければ独立を企てて池田カリスマ化、板本尊模刻、人間革命現代の御書、会館は現代の寺院などと謗法が目にも余るようになっていったにもかかわらず、学会の懐柔策にのせられた阿部師はこれを擁護し続け、平成二年頃になって学会が再び攻撃的になってくると学会を破門したためにスキヤダルの曝露、いやがらせ、訴訟合戦、諸建築物の解体など善導するどころか泥沼の紛争となつて、かつて学会を賞賛していた自らの誤りを一部認めざるをえなくなったものです。

しかしその反省の弁も、弁解に終始して何がどう間違っていたのかは一切触れておりません。詐称疑惑にしても、学会と



学会によって模刻された板御本尊

共謀して弾圧してきた正信会問題にしても、独裁的宗政や宗門私物化の批判にしても頼破りしたままです。「私は騙された」発言についても事情を知らない人や取りまき連の「日頭上人もお気の毒に」などという同情を買うためらしく、情けないことです。阿部師が騙されたおかげで、宗門はどれだけ被害を受け

たか、計り知れない汚点を残しました。永年にわたつて教学部長の要職にあつて学会を賞賛し、逸脱を許してきた張本人として、後になって騙されていたなどと被害者ぶるのは恥ずべき事で、無責任きわまりないことではないでしょうか。

《正信覚醒運動の成果》

阿部宗門と池田学会の蜜月時代、両者が共謀して行つた正信会に対する策略の数々は、この正法・正師の正義を正直に受持すれば、必ず大難が競い起こるという法華経の予証の実例となり、ある意味で喜ぶべき事象なのかも知れません。

また何よりも、一般世間と同様に学会批判がタブー視され、言論統制されてきた宗門にあつても、一時期、自由に物が言える状況が生まれました中から数多くの情報が発信され、数多の言論・記録が生まれましたが、このことは日本の社会の政治状況や学会内部の動向にも大きな影響を及ぼし、熱狂的な宗教団体が

日本型ファシズムへ変化するリスクを防いだともいえます。旧統一教会問題で指弾されるようなことは、四十数年も前から訴えて来たのです。

教学研鑽でもこの運動の内外で活発な論争が行われてきて、政治的な都合や狃下・先生の歓心を買うためのような御用教学、あるいは売文の高額の原稿料めあての先生方のご高説は論ずるまでもないが、教団の永続こそ法燈相統という古びた主張も、時の流れの中で色あせてきて、法を捨てて教団を取った歴史の綻びが拡がって、自己保身の醜態が見え隠れしてきました。

それに引替え文字通り法を守ることを第一義にして教団のくびきから開放された若輩者の道念と求道の志からは幾多の新たな布教所と教学研鑽の成果が実りつつあることを見れば、どちらが正しい受持行であったか思い知るようになるでしょう。

そうかといって宗門・創価の執行部の人々を憎むことはないでしょう。彼等宗創の幹部は「敵役も善知識」という役割を担っているのだから妙法蓮華経の受持行の前に遺恨はないものです。

《御本尊の受持、目に見えるモノか》

いつも疑問に思うことですが、永年この御本尊を拝し唱題し、信行に励んだはずの高僧や大幹部が、なぜこうした近親憎悪のような紛争になっていが見合うのか、宗門人にしても学会幹部にしても毎月のように登山して御開扉を受けてきたはずのものが、よく分からない理由で不倶戴天のような関係になってしまいい、大聖人がどうご覧になっているのか気にする様子もない。

私はこのことの第一の理由はその信心のあり方に問題があるのではと考えております。

本尊観とか受持行についてこれまでのべてきたように、妙法蓮華経の十界曼荼羅を拝んでも、その御本尊は決して余所ほかにあるのではない。すべては己れの心に具わっているのであるから、四六時中受持行がある、持つとは、「幸福製造機」と称するような何でも願いを叶えてくれるありがたい掛け軸をおがんでいるというような認識ではまったく受持したことにはならない。余事余念無く仏心を持つとは南無^ニ帰命であるからわがいのちを妙法蓮華経に奉ると同義である等々。御書の意を正直に受け止めれば、我慢の心と余所ほかにかに祀った本尊では話になりません。

余事余念ない信念受持によって事一念三千即久遠元初の自受用身の妙法蓮華経の御本尊を感得できるのであり、もし信がなければ見仏開法は適いません。寿命品には「雖近而不見」とも「不聞三宝名」と説かれ、信なくしては不見不聞、御本尊を見ることが聞くこともできないというのです。

このことについても我々は「御本尊とは誰もが目で見えるようなものではなく、信心による」と論じました。するとこれに対し、阿部師は「(正信会の者が)本尊とは目にみえないもの」といつている。それでは禅宗だ」と反論しておりました。ここでもその本尊観が本質的には世間一般人とほとんど変わわず、掛け軸になったモノという蒙昧の中から出ていません。これだと「魂魄、佐渡の国にいたりて……」というような御書はどうい理解できていないでしょうし、日寛上人の証重における法

門、すなわち当体義抄の一節の、

「三道即三徳」とは人の本尊を証得して、我が身全く蓮祖大聖人と顕るるなり。「三観・三諦・即一心に顕われ」とは法の本尊を証得して、我が身全く本門戒壇の本尊と顕るるなり。「其の人の所住の処」等とは戒壇を証得して、寂光当体の妙理を顕すなり。

等の説示は本宗旨の肝要でもあるが、日頭師とつては詐称疑惑と並んで我が身まったく説明不能のまま白日の下に顕れてしまったのでした。

《迹を借る御本尊の相貌》

御本尊の受持の意味が違えば、そこからすすんで境智冥合の意味も異なることとなります。日寛上人は「観心本尊抄文段」に、「今日寿量品の儀式は文上脱益、迹門の理の一念三千、教相の本尊なり。若し今遺付の本尊は文底下種、本門の事の一念三千、観心の本尊なり。然るに本事已往、若し迹を借らずんば何ぞ能く本を識らん。」

と仰せのように、曼荼羅本尊の座配を見ると二仏並座・本化・迹化・身子・目連等とあつて、これは釈尊在世の今日寿量品の儀式であるとの設問を設け、これに答えて上行付属の妙法蓮華経の本尊は文底・下種・本門・事一念三千・観心の本尊でありますから、本時已往 若し迹を借らずんば何ぞ能く本を識らん。と解説されております。久遠元初の自受用身即事一念三千の妙法蓮華経は、本地難思・因果俱時・不思議の一法の妙法蓮華経ですから、その法体が誰の目にも見えるようなものではないのです。

本時已往とは久遠元初の意味でこれは不可思議の久遠ですから信じて拝するばかりなのです。その上でこの仏在世の塔中の妙法蓮華経に三意ありとして、一、本有の五大。二、十界互具。三、境智の二法と記されております。これについて「三重の境智」ということがありますが、煩瑣になりますから次の機会を期します。

境智の二法は天台大師の玄義で迹門の十妙が説かれますが、その一番目に境妙、次に智妙、行、位と続きます。これが初出かと思えます。しかし境智冥合の概念は摩訶止観の第七、正修止観章で、十境十乗の観法を解き明かしまして、その肝要は心の不可思議なことを観ずるというものです。そこで初めて一念三千の用語と概念を説かれたのです。すなわち大聖人は「観心本尊抄」の冒頭に、

「摩訶止観第五に云く（世間と知慧と二なり、開合の異なり）「夫れ一心に十法界を具す。一法界に又十法界を具すれば百法界なり。一界に三十種の世間を具すれば百法界に即ち三千種の世間を具す。此の三千、一念の心に在り。若し心無くんば已みなん。介爾も心有れば即ち三千を具す。乃至、所以に称して不可思議境と為す、意此に在り」等云云。

と標記なされて、像法出世の天台大師の終窮究竟の極説として一念三千の法門を取り上げます。「開目抄」でも冒頭の主師親の意義に始まって、次に一念三千の法門をひとまず掲げます。

「一念三千の法門は、但法華経の本門寿量品の文の底にしづめたり。竜樹・天親知りてしかもいまだひろいださず、但我が天台智者のみこれをいだけり。三千は十界互具よりこと

はじまれり。」

とありまして、宗旨建立の前提になる大事な法門です。この一念三千観は、十乘観法の観不思議境に説かれるところですが、これは「妙とは不可思議」とおなじことで、わが心（陰入界の最初）を十種の観察法の第一観不思議境で観察すること、非常

に難解ですが、試みに私の未熟な解釈は、次のようなものです。われわれの心は思えば不可思議であり、精妙であるということに気づくことが入門です。色受想行識（五陰）の身体（器官）と感受作用、記憶、判断、認識のいづれも、その働きや由来なども分かつているつもりでいるが思議してもわからないものです。不思議とは現代人の使う不思議ではなく、人間の思考の及ばないという意味です。

また人が妙法の力用を感ずるのは、やはり生死に関わるときかもしれません。多くの親は、子どもが生まれる時に、何かよく分からない大きな力でこの世に生命が送り出されるのを感じて、只々五体満足で生まれることを祈ります。同じように自分にも誕生已前の父母未生已前があり、死んでいった祖父・曾祖父・先祖・そのまた先祖にも父母未生已前があり、飼犬にもゴキブリにも草木にも父母未生已前があるのです。その間に何が あったのか、何処から来たのか、考えても分かりません。自



身土は不二の関係にある

分が何であるかさえ分からないが、心やいのちが不可思議だということに分かるのです。一瞬の心に法界のすべてが具わっているのです。あるがままの姿をみれば、我が身が地水火風空の五大そのものであり、森羅万象「仮有」の瞬間的な現象の連続であるといえれば多少わかったような気がするかも知れませんが

不可思議ですからやはり分からないのです。それでもこうして生死の狭間はざまを生かされて生きているのです。妙法蓮華経に南無するばかりです。

摩訶止観の一念三千の依文は、それをさらに妙楽大師が解釈して、

「当に知るべし、身土は一念の三千なり。故に成道の時、此の本理に称ひて一身一念法界に遍し文。」（同）

といわれて、身土、この心身とそれを支えている国土世間はみな一念の三千の姿である、心がすべてであると説くのです。また止観の引用文に「此の三千、一念の心に在り」とありますが、より正確な意味として、心がすべてのものを生み出している（發生論・縦）というのではなく、また心に一切のものを含んでいる（存在論・横）というのでもないと説明したうえで、さらにまた「心はこれ一切の法、一切の法はこれ心なるなり」とも説いて、これを不縦不横の一念三千という定義づけをしております。（以下次号）



令和五癸卯年

みずのとう

謹賀新年



年頭にあたりて

講演 森 秀之

令和五年明けましておめでとうございます。

源立寺法華講の皆様、ますますのご多幸とご健康をお祈り申し上げます、自身も日々精進を怠らず、ご奉公に努めてまいります。

昨年は、コロナ禍騒動での第五十回法華講総会が開催され、新役員体制の発表、寺報の「恵日」のホームページ作成と、源立寺法華講として節目の一年となりました。

菅野御住職の総会の挨拶に、「我われ生きていく限りは、同じところに足踏みをすることは許されないのであります。日々川の水が流れているように、我われの命も時の流れそのものであります。常に新たな志を奮い起こして、精進を続けて悔いの無い人生を送っていかねばならない」とありました。

本年は、ロシアのウクライナ侵攻の長期化による、世界規模でのインフレ、国内では円安によるますますの物価高騰と、若者世代は給与も上がらず、高齢の年金世代は年金給付も削減され、経済的にさらに厳しい状況です。

統一教会による、政治と宗教絡みの問題は収拾がつかず、他の政策は、国民が知らない間に関連団体に都合の良いように成立するような状態で、政権も機能せず、治安だけは何とか保っている無政府状態に近い状況だと感じます。

SNSの普及に、価値観もすっかり変わってしまい、今までの常識が全く意味を持たない感もあります。AIの進化により、百年掛かった事象が、一年もしない内に市場に出回っている状況です。その中で、ユダヤ、イスラム、キリスト教という欧米の宗教の思想性が経済優先、覇権主義が顕著になり、日本も第二次世界大戦以降の教育方針の中で骨抜きにされて、日本で重んじられた天皇制がもっている権威であるとか地域コミュニティ、伝統や文化といった精神性の崩壊が言われています。

そのような情報が、SNS発達によって私たち庶民にもわかるようになったというメリットがあり、テレビ等のニュースによる偏った情報を、吟味できるようにまりました。

とくに宗教は、日本ではここ三十年で、胡散臭いという価値観が植え付けられ、若者世代の宗教離れの感があります。私たちの信仰でも、世間では南無妙法蓮華経といえは創価学会と、一括りに扱われる感もあり、本来の大聖人・日興門流の信仰を伝えていくのにも、難しい状況になっているのも事実です。御書に、

「是等の趣を能く能く心得て、仏になる道には我慢偏執の心なく南無妙法蓮華経と唱え奉るべきなり」（法華初心成仏抄）と。

改めて、私たちの信仰の根本である「一生成仏」を信じて唱え、今年一年も、日々志を奮い起こして法を伝えていくように「法灯相續」に取り組んで頂く事をお願いして、年頭の挨拶と致します。

その中で私たちは、その時代のまった中に生かさせて頂き、各々がいかなる因縁でも、遇いがたき南無妙法蓮華経に巡りあい、源立寺に参詣しご奉公させて頂いていることを、本当に喜びと感ぜられるような信仰に、精進してまいります。

興風談所の研究成果(十六)

興風談所 菅原関道

『日蓮仏教研究』五号に寄稿

平成二十五年(二〇一三)三月三十一日刊の『日蓮仏教研究』五号に菅原関道「中山法華経寺蔵『秘書要文』の考察」が掲載された。『秘書要文』は昭和五十六年に中山法華経寺が作成した『日蓮大聖人第七百遠忌記念 中山法華経寺聖教殿所蔵 日蓮大聖人御真蹟御遺文(複製)』によって初めて全貌が知見できた文献(同三号・四号で考察した『識分法門一念三千即離事』も同じ)であり、



『秘書要文』の表紙(常忍筆)

宗祖筆が一割、他筆が九割で、宗祖筆部分の影印公開と翻刻は過去に行われている。菅原は許可を得て全体の影

印掲載・翻刻・考察を行い、他筆の八割が富木常忍筆、二割が某者筆であり、建長七年(一一五五、宗祖三十四才)頃の作成と推定する。内容は経論釈の要文の他に、教学用語の説明や図示、梵字の解説など多岐にわたり、若き宗祖が常忍や某者に種々教示して研鑽する姿を彷彿とさせる貴重な文献である。図版に示した表紙の中央上に、常忍が「秘書」と表題を書いている。その右側の梵字二字は秘書を同音の梵字で記したもので、左下の梵字二字は所持者の常忍の名を同音の梵字で記したものである。

『興風』二十五号

『興風』二十五号は平成二十五年十二月十三日刊で、佐藤博信「安房妙本寺門流の展開と駿河小泉久遠寺―特に代官日義・日提・日珍段階を中心に―」、山上弘道「『三世諸仏総勘文教相廢立』の真偽について―花野充道氏の真撰説批判―」、坂井法暉「本門寺とその展開―富士戒壇論研究ノート―」、大黒喜道「『注法華経』拜読ノート(下)―第四巻から観普賢経まで―」、菅原関道「日蓮聖人の戒壇論―本門戒と本門寺と本門戒壇の視点から―」、石附敏幸「宗性『調伏異朝怨敵抄』の成立」という内容である。

十五世紀中頃、日郷門流では本寺たる安房妙本寺(千葉県鋸南町)を中心に、代官所の小泉久遠寺(静岡県富士宮市)、学頭坊の日向本永寺(宮崎県宮崎市)による運営体制が確立した。佐藤氏(千葉大学教授)はその後の展開、特に久遠寺歴代の日義・日提・日珍の時代を考察する。天文六年(一五三七)春、富士殿(富士大宮司)は北条氏の河東(富士川の東側から富士下方・上方

・駿東郡に及ぶ) 侵攻を契機に国主今川義元に叛旗を翻し、それに与同した人々が久遠寺上坊に立てこもって戦鬪となり、諸堂を焼失した。妙本寺日我は復興に取り組む。宗祖御影像の還座、勤僧・檀那の帰住を経て、天文十四年に弟子日義(一五〇九頃)一五八二を代官とし、同十八年に諸堂完成、日我の久遠寺常住本尊が授与されるまでとなった。この間、日我と日義は安房国主の里見義堯(よしたか)、駿河国主の今川義元に働きかけ、久遠寺の不入権、無縁所たるを獲得し経済的自立を確保した。しかし永禄三年(一五六〇)と同五年の日我書状によれば、妙本寺と久遠寺の上下関係揺るがす動きがあった。そんな中で、日義が久遠寺を離れて北山本門寺貫首に就く事件が起きる。時期ははっきりしないが、永禄八年に久遠寺を離れ、同十年頃に本門寺貫首になった(菅野憲道「武田氏の駿河侵攻と富士門徒」『興風』十六号)という推測を支持し、本門寺僧檀の強い要請による就任であったとする。日殿と名を改めた日義は妙本寺の日我・日侃(かん)に改悔(かいげ)の書状を送って、転住により生じた両寺対立の解消、和融関係の復活に努め、日我也これに応じて関係修復を計った。永禄十年頃、日我は次の久遠寺代官に、日向出身の信頼する弟子日提を任命した。ところが同十一年十二月、今度は武田信玄が駿河に侵攻。翌年二月に北山本門寺や大石寺の諸堂が焼失し、久遠寺も被害を受けた。日提ら衆徒は本尊聖教を奉持して伊豆へ避難し、元龜二年(一五七二)十二月の甲相同盟の復活後に帰還。翌年、駿河国主の武田信玄が久遠寺の不入権を安堵したが、天正七年(一五七九)になってやっと御堂を再建できた。

天正八、十年頃、新たに日珍(一五六二)一六四三が久遠寺

代官に就任。いまだ二十才前後であったが、日殿(日義)と同じく駿河鈴木氏の出身で、幼少より日我に養育された愛弟子である。世上では天正十年(一五八二)三月に甲斐武田氏が滅亡し、六月に本能寺の変が起きる。その前後、北条・武田・徳川・織田の間で大規模な戦争が繰り広げられ、富士郡は灰燼に化す。しかも、こうした中で西山本門寺の日春の意を受けた武田氏が北山本門寺宝物を乱取(らんとり)(掠奪)する事件が起き、その返還を求めて日殿が天正十年二月五日に自死する。この状況下、日珍は三たび諸堂を復興せねばならなかった。しかし駿河国主徳川家康の諸役免除・安堵の朱印状獲得や、身延久遠寺との寺号相論にかかる費用、自然災害による不作などにより小泉久遠寺の経済は悪化し、文禄元年(一五九二)になって、ようやく諸堂再建が可能となるところまで持ち直した。日珍は老僧日提、植松(小泉)氏らの僧檀に支えられながら諸難題に対処したが、中でも植松氏の経済的貢献は絶大で妙本寺にまで及ぶ。日珍や植松氏ら久遠寺僧檀が主導権を握り始めたこと象徴として、妙本寺後住問題がある。日侃は本永寺日成に譲ろうとしたが、僧檀の総意により、文禄三年に日珍が妙本寺貫首、本永寺日成が久遠寺代官兼務となる。佐藤氏はこれを学頭坊の事実上の無力化であり、門流体制が久遠寺―妙本寺(久妙)体制へと変化したと評する。

『三世諸仏総勘文教相廃立』の真蹟は伝来せず、初見は中山日祐の『本尊聖教録』(一三四四年作)写本部の記載で、平賀本の奥に「弘安二年己卯十月日」の執筆年がある。山上は本書の先行研究を概観し、伝来と系年、『自行略記註』『止観勘文』との類似性、引文や内容の問題点等を考察し、「浅井要麟氏が

指摘するように、心性本覚を強調し、進んだ無作三身論や觀念成仏論、そして凡仏逆転の思想が展開されるなど、中古天台本覚思想の影響が濃厚であり、これらの思想は宗祖の真撰遺文には見られないことから、本稿では『総勘文抄』を疑義濃厚な遺文と結論しておきたい」と総括して花野氏の真撰説を批判する。

坂井は第一章「本門寺」^{おぼろがき}覚書にて、宗祖滅後の本門寺関係の正文書から、日朗門流上代に「本門寺」「本門寺聖人」の号が見える、日興にとって本門寺は広布の時に建立される寺院、富士山を本門寺建立地に選定したのは重須移住後の日興であると述べ、第二章本門寺の展開では、日興・日目の入寂、方便品読不読問答、日代の動向、日代の退出と本門寺の展開、「本門寺棟札」とその周辺、大石寺門徒の動向を順に述べ、日興の正嫡をめぐる上野・重須・西山の諍論の中で本門寺に関する偽文書が作成されたとする。最後に『日興上人御遺跡事』の偽作説や「御下文（園城寺申状）」の文の異解釈、日興書写本尊の添書「大石持仏堂本尊」を後人加筆とする説に反論して退ける。

大黒は前回に続き、『訓下本・注法華経』の末註をベースにして再び考察を加える。今回は『注法華経』第四巻から最後の観普賢経まで。この重厚な論考を一層充実させるため、少し長くなるが一点だけ指摘したい。原始天台では迹門と本門の実相を本迹不思議一（＝実相同）とするが、原始天台にわずかに見える実相異と解釈できる文を集めたのが表⑥38A～49の一群である。宗祖はその標題を38Aに「迹本の理の勝劣の事」と記し、38B・39～49の十二箇の釈文（玄義・釈籤・文句・文句記・玄義略要）を記入した。布施義高「『注法華経』「迹本理勝劣事」をめ

ぐって」（『法華宗宗学研究所所報』第二十四輯・平成二十一年）はこの一群を考察した秀逸な論文である。その41に「玄義略要」に云く、（中略）迹門は性より修を起し、修を以て証するを体となす。本門は如来の久証の実相を体となす。故に体は即ち妙法、妙法は即ち修証なり」（仏全二六・五四一下）とあり、本門の実相は久成仏が修証した妙法であるという。問題は『玄義略要』の撰者は誰なのかであり、『智証大師請来目錄』に「妙法蓮華経玄義略要 一卷 武丘」というも、古来円珍撰と傳承されてきた。しかし近年の研究では円珍撰ではないとの見方が有力である。少し紹介しよう。『玄義略要』円珍本は表の本文と背書によって構成され、本文の円珍奥書は「大中十年十一月九日於国清寺勘過。（中略）円珍記。此文与科目比勘多同少異。雖然堪行持之。十一年二月十三日珍於五峯記」、背書の円珍奥書は「大中十一年二月十三日日本沙門円珍於天台山記」である。この記述から池田魯参氏は、本書は天台山国清寺において円珍が勘過した翌年、『科目』と比勘し、差異点を会釈して紙背に書き入れて日本に行持したものとした。これを受けて池田宗讓「円珍撰と伝えられる『玄義略要』をめぐる」（『天台大師研究』平成九年）では、本文奥書の「於国清寺勘過」の意味を「天台山国清寺において玄義略要の原本と円珍書写本とを一通り勘校しおわった」と取り、魯参氏同様、『玄義略要』本文は円珍撰ではないとした。そして右の円珍目錄に「武丘」とあるのを尊重し、武丘有縁の学僧を『宋高僧伝』に求め、元浩の死後の塔所が蘇州の「虎丘（武丘）」にあり、「武丘山元浩」と呼ばれていたことを示し、死後の塔所、またはその活躍地にちな

んだ呼称であろうとして、湛然たんぜんの弟子元浩の著作と断定した。では宗祖の認識はというと、『注法華経』開116に「山王院云く」として『玄義略要』の文を記すことから、布施氏は山王院（円珍）撰と考えていたとし、大黒も同調する。しかしこれは『玄義略要』背書の文であり、背書は奥書にあるように円珍記にまちがいないから、宗祖も「山王院云く」と記したのである。『注法華経』開121に「玄義略要の内題に曰く」として記すのも背書の文である。対して、前記の41は『玄義略要』本文の文で、41には撰者を誰と考えていたかを知る手がかりはなく、宗祖が円珍撰として記入したとは断言できない。私は円珍撰と考えていなかっただろうと思う。ところで『注法華経』開115の「科目に云く、化儀の一頓、化法の一円」は『玄義略要』背書の文で、現在この『科目』も撰者未詳とされるが、実は大石寺三世日目が同文を安房妙本寺蔵『宝地房十同事等要文』六〇丁表に「科目に云く（妙楽釈也）、化儀の一頓、化法の一円」（『興風叢書』〔18〕二七一頁）と記し、妙楽湛然の著作と注記する。円珍は本文奥書で「此文与科目比勘多同少異」（この玄義略要の文は科目と比勘した結果一致点が多かった）と、『科目』を権威ある書としていて、湛然の著作であれば元浩の『玄義略要』の内容を比較検討するに値する。『宝地房十同事等要文』には『注法華経』と同じ要文が多く記入され、日目は身延入山当初より宗祖の側で修学しているから、「妙楽釈也」は宗祖の教示である蓋然性が高いだろう。もしそうであれば宗祖は、円珍は自ら書写した『玄義略要』本文を国清寺で勘過し、湛然の『科目』と比勘した結果一致点が多かったが、『玄義略要』円珍本

を日本に請来する価値はあると考えた、と理解していただろう。菅原は戒壇論における本門戒壇と本門寺の関係、本門虚空会の儀式を図す曼荼羅本尊との関係、一大秘法が本門戒体、日本国主による戒壇（本門寺）建立への期待と挫折について述べる。石附氏（開成高等学校教諭）は従来等閑視されてきた東大寺宗性著『調伏異朝怨敵抄』後半部を分析し、最勝講などの国家的法会に出仕する宗澄・宗性等の学僧が、蒙古国書到来という対外的危機をどう認識していたかについて、①神仏が日本を守護し、蒙古は日本の仏教信仰に触れることで感化され、自然に退散していくだろうとの自負が感じられる②遊牧民族特有の獣祖伝承を逆手にとつてその獐猛どうもうさを印象づけ、日本民族に対する劣位性を強調する特徴があるという。対して日蓮は蒙古侵攻を、法華信仰の衰微を放置してきたことへの仏神の鉄槌であり、天が派遣した治罰の使いと見ていて、民族的差別観はないとする。

『興風叢書』〔17〕

『興風叢書』〔17〕は平成二十五年十二月十三日刊で、①『惠檀両流秘決・上下』②『一心三観本文』③『一心三観血脈』④『色心実相境智口決・一心三観口決・一心三観口決（伝）』⑤『天台灌頂玄旨口伝・玄旨重大事口決』⑥『惠光房嫡流口伝』⑦『山家五箇一心三観 惠光院流秘決』等の中古天台に關わる七冊一〇点の文献を翻刻・収録する。経海撰の③には湛然の『金剛鉚論』を引用した中古天台特有の真如観が「本門意、真如是万法由二随縁一故ト云テ、本門寿量ノ前ニハ万法悉真如全体ニシテ諸法悉本有常住也。則談ニ俗諦常住旨ヲ」（一六九頁）と見える。

《御逮夜講演(要旨)》

御書中に見える、「米」について

法華寺内 藤 村 道 監

みなさんこんばんは。本日は源立寺におかれまして、宗祖日蓮大聖人の御会式御逮夜法要が奉修されましたこと、誠にありがとうございます。

以前にも御逮夜にて、お話をさせていただく機会がありまして、いっただったかなと思、「恵日」のホームページを使わせていただき調べてみました。九年ぶりだそうですが、この九月に開催された第五十回の記念総会に出席をさせていただきました。久しぶりにお逢いするという感じはありませんので、気楽に聞いていただければと思います。

明日の源立寺さんでの御正当会をもって、令和四年度の南近畿寺院での御会式

奉修はすべて終了することになります。私が、ご奉公させていただいております法華寺は、二週間前の十月二十三日に、講中の方々のご協力を得て、無事奉修することができ、有難く思っています。

《御会式の御宝前に》

私事ですが、三年前から御会式の時に、自分で作ったさつまいもを御宝前にお供えをさせていただいています。

なぜさつまいもかというところ、法華寺を建立する際に、色々ありまして畑を管理することになりました。畑と言ってもちよつとした山の畑なんです、その裾の平地な部分の一角が、みなさんの記憶に

もあると思いますが、四年前の台風二十一号で木が倒れ、空いたスペースができたので、この際、何か野菜でも作ろうと思、さつまいもを作り始めました。さつまいもは素人でも作りやすいですし、収穫時期も御会式とかぶるので、私的にはぴったりだったのが、その理由です。

また、その山の畑には、御宝前にお供えする櫛を始め、正月の門松に使う松、竹、梅、御会式の御宝前に飾られている俵に巻くみかん、柚、柿など、まだ他にもあるんですが、お寺のことをしながら、農作業をしています。

年に数回、草刈り機で草を刈ったり消毒したり、チェーンソーを使って選定を

したりと、大変なことも多いですが、収穫の楽しみもあったりするので、やってみるとけっこう楽しいもので、いつかはほんの少しでもいいので、お米を作って御宝前にお供えできればなあ、なんて思っています。

こんなことを言ったら、周りからそんなことする暇があるなら、法門の勉強をしろ、と言われるかもしれないが、そこは目をつぶっていただければと思います。

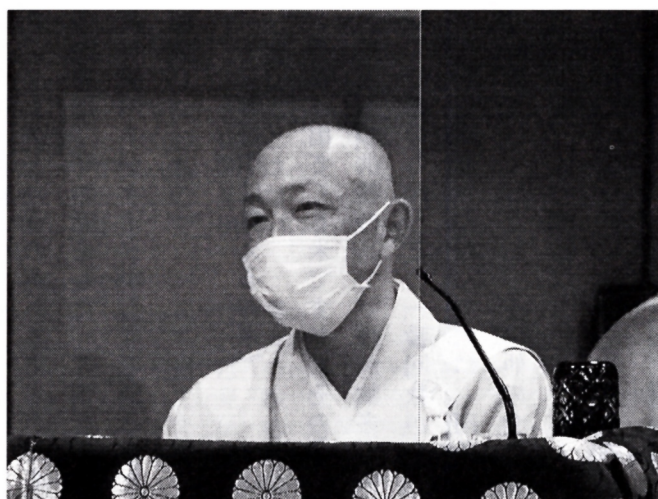
私が、こうして御宝前にお供えするわけは、今年最初にとれた物を、まずは大聖人に召し上がってほしい、という気持ちからきてます。先程のさつまいもそうですし、春には一番最初に掘った筍などもお供えています。

こうした大聖人にめしがってほしいというお気持ちには、大聖人御在世当時の檀越にも多いにあったことだと思います。御書を拝見しても、供養した品々がたくさんでてきます。今日はそういう供養された品々の中でも、よくでてくる「お米」をテーマとしてお話をしていきたい

と思います。

《お米の歴史と文化》

私は、ご飯かパンかと聞かれたら、ご飯と即答できるくらいはご飯派です。み



講演される藤村道監師

なさんはどうですか。ご飯派ですか、パン派ですか。

丁度、今の時期は新米の時期ですから、炊きたてのご飯は格別で、食べた時は日本人に生まれてきて良かった、と思える

ほどとてもおいしいものです。

米の歴史は、今から三千年前の縄文時代後期に、大陸から伝わって来たと言われていいます。現代では、お米は私たちが食する穀物の一種というふうなものですが、明治時代までは、民が納める税としてお米を納めるなど、現在のお金を税として納める私たちと昔の人では、お米の価値が大いに違うので、如何に多くの米を収穫し、与えられるかが、権力者の力の象徴ともなっていました。

その一方では、お米は日本の文化として、欠かせないものになりました。主食としての文化もあります。また、みなさんの目の前の、御宝前のお供え物を見ていただくと、餅、酒、赤飯と、お米からできているものがお供えされています。私が知っているお寺の御会式には、必ずといっていいほど、この三つは御宝前にお供えされています。理由は、日本ではおめでたい時には、これらを食す文化があるからです。ただ最近では食べものの欧米化の流れのせい、若し人にはこの文化も、ピンとこないのかもしれない

ん。少し残念に思えます。

また、お米は、仏教を信仰する人にとつても重要なものです。みなさんもそうだと思いますが、普段から御本尊にお供えをするように、お水を除いて、食物でいうと一番お供えをしているのが、ご飯、お米です。この辺はどうかはわかりませんが、私のいる地方では、人が亡くなると、枕飯と言って茶毘にふすまで、お腹いっぱいにして死出の旅路でられるように、毎日ご飯を炊いて故人にお供えをし、告別式のあとのお別れの際には、お腹をすかした時に食べられるように、告別式でお供えをしたご飯を、棺にいれるという風習があります。

では、仏教でお米にまつわるお話というと、一般的に有名なお話が「スジャータの乳粥」です。釈尊が、王子としての地位や家族を捨てて出家した後、六年もの長い間、難行苦行を行い、肋骨が浮き出る程にやせ衰えるまで修行を続けたのですが、ついに悟りは得られることなく、苦行を放棄しました。

そして、ガヤーの近くを流れるナイラ

ンジャナー川で沐浴したあと、村娘のスジャータから乳糜にゅうびの布施を受け、苦行によつて衰弱した心身を回復し、その後、菩提樹の下に坐して瞑想に入り、悟りに達して仏陀となったというお話です。

ちなみに、コーヒーに入れるミルクにスジャータというのがありますが、名前の由来は、今お話をした、乳粥を布施した村娘のスジャータからきているみたいです。

《御書中に見えるお米》

御書に出てくる米ですが、その多くが大聖人への供養の品で、誰が数多く供養しているかという点、一回数が多いのが、南条時光さんなんですね。南条さんはお米だけではなく、その他の食べ物についても、他の檀越以上に、大聖人に供養されているのが、御書を拝見するとわかります。

身延に近い上野にいた、ということもありませんが、身延がどういうところかもよくご存じだったんだと思います。大聖人は身延の地について、

「さてはふかき山にはいも(芋)つくる人もなし。くり(栗)もならず、はじめみもをひず。まして、やきごめみへ候はず。たといくり(栗)なりたりとも、さる(猿)のこすべからず。いえのいもはつくる人なし。たといつくりたりとも人にくみてたび候はず。いかにしてか、かかるたかき山へはきたり候べき」(九郎太郎殿御返事 全集一五 五三頁)

と、深い身延の山中には芋を作る人もいません。栗もならないし、生姜もはえません。まして焼米などは見ることも叶いません。たとえ栗の実がなっても、猿がみな食べて残しません。里芋は作る人がいません。たとえ作ったとしても、憎まれ者にはくれません。どうしてこんな高い山奥へ来てしまったのだろうかと言われるほど、身延は食べ物に困るところであることが伝ってきます。このような身延での生活には、大聖人を始め弟子等も大勢いたので、この南条さんからの度重なる供養は、大変有難かったことだと思います。

私のおります有田でも、猿ではないですが、イノシシによる農作物の被害をよく聞きます。今の時期だと、山の畑のみかんを食べに来ます。農家の人は、畑に入つてこないように、畑の周囲に鉄の柵や電気柵をして対策するのですが、イノシシも賢いもので、少しでも入れそうなところが一か所でもあると、そこから入つてくるので、農家の人も頻繁にやぶられていないか頻繁に見回る必要もあり、なにかと苦労されていますが、動物から見れば、目の前に食べ物があるから食べる。人の為に残そう、なんて考えはありませんから、大聖人のおられた身延も、栗だけでなくその他のものも、様々な動物がたべていたんだと思います。

大聖人の御書にお米が出てくる話として、最初の大難である伊豆流罪での、船守弥三郎夫婦とのお話があります。

船守弥三郎は、幕府が大聖人を亡き者にするため、伊東の近くの満潮になると沈んでしまうような、小さな「まないた岩」に一人置き去りにされた大聖人を、救つたうえに地頭の伊東八郎左衛門や、

周囲の住民の、大聖人様に対する厳しい怨嫉おんしつや迫害の中で、妻と共に、三十余日にもわたり匿い食事を運んだことに対して、大聖人は「船守弥三郎許御書」に、



大聖人を献身的に世話された弥三郎夫妻(日蓮大聖人御一代絵図)

「ことに五月のころなれば米もとぼ(乏)しかるらん、日蓮を内々にてはぐく(育)み給ひしことは、日蓮が父母の伊豆の伊東かわな(川奈)と云ふところに生まれかはり給ふか。」(全集一

四四五頁)

と、夫婦も米が少なく、日々の食べ物に困っているにもかかわらず、日蓮を内々に養われたことは、あるいは日蓮の父母が、伊豆の伊東の川奈というところに生まれ変わられたのか、と思つたほどである、この時の大聖人は、知らぬ土地で人知れずに身動きの取れない状態だつたことがまるで、何もできない赤子のものであり、そんな大聖人にみずからの危険をもかえりみず、食事の世話をする夫婦姿が、親が赤子に愛情を注いでいるように感じられたからこそ、自身の父母という御言葉となつて、出てきたのではないのでしょうか。

大聖人は米の供養について、曾谷殿に、「米は命を継ぐ物なり」(全集一〇五九頁)

と、大事なものであると仰せになっています。

現代の人の私たちは、お米という様々な食べ物の中の一つ、という見方をしています。飽食の時代である今は、お米がなくても他のもので済ますことが

可能ですが、大聖人が食していたものは、供養される穀類や根菜類、そして海藻類などがあります。栄養があるものというのと、お米になってしまいます。鎌倉時代の大家だからこそ、「米は命を継ぐ物なり」という言葉が出てきたのだと思います。ですから、

「譬へば米は油の如く、命は灯の如し。法華経は灯の如く、行者は油の如し。檀那は油の如く、行者は灯の如し」

(同)

と、お米は油のようであり、人の命は灯のようであるように、油が無くなれば灯は消えてしまう。また、法華経は灯であり、行者は油である。法華経の教えの通りに修行する行者がいなければ、たとえ法華経があつたとしても、何の価値も持たない。そして檀信徒は油であり、行者は灯であるように、布施する檀信徒の支えがなければ、行者の生命は保持できない関係であるとし、また、南条時光氏の米の供養に対するお手紙には、

「又法華の行者をやしなうは、慈悲の中の大慈悲の米穀なるべし。一切衆生を利益するなればなり。故に仏舎利変

じて米と成るとは是れなるべし」(全集一四六七頁)

と、法華経の行者に供養された米穀は、法華経の行者の生命を支え、法華経の行者の大慈悲の生命の中にとり入れることによって、米穀自体が一切衆生を利益する働きをしていくことになるのである。

「仏舎利変じて米と成るとは是なるべし」

と、仏舎利があらゆる衆生を利益するとされているように、法華経の行者に供養された米穀は、あらゆる衆生を利益するとして、米を供養することの功德の大きさを述べられています。

ですので、お米をひとつとっても、大聖人と私たちでは、見方が違ったのだと思います。

《米を「命」と見られた大聖人》

大聖人は、米は命であると仰つても、私たちには食欲をみたす食べ物と、みてしまいます。それは末法の凡夫である私たちは、欲というフィルターのようなのを通して見てしまいますが、法華経の

行者であられる大聖人は、フィルターさえないそのまま、ものごとを見られたのだと思います。「白米一俵御書」に、

「法華経はしからず、月こそ心よ、花こそ心よと申す法門なり。此れをもつてしろしめせ。白米は白米にはあらず。すなはち命なり」(全集一五九七頁)

と仰せになつておられるように、大地や草木、月や花を見ても、今夜の月は明るいなあとか、今夜は満月できれいだなあと、見るこちらが、それぞれの心の状況に応じた見方をしているだけで、月を見る人に併せて形を変えているわけではなく、私たちが勝手に、違う見方をしていただけです。

しかし、大聖人は、米も命と見えただと思えます。法華経を身読され、仏の境界に立った大聖人だからこそ、出てきた御言葉ではないでしょうか。

明日は、御正当会が奉修されますが、明日も皆様と共に、御報恩の気持ちをもつてお題目を唱え、大聖人の御祝いをいたしたいと思えます。

ご清聴有難うございました。



聖道寺を会場に開催された、第21回南近畿法華講研修会

恵日だより

南近畿法華講研修会

十一月二十七日(日) 午後一時



発表する細川美恵さん

十一月二十七日(日)、絶好の秋晴れのこの日、大阪市阿倍野区の「流布山聖道寺本堂」において、「原点に帰ろう」―大聖人の仏法、日興上人のご精神を求めて―をテーマに、第二十一回南近畿法華講研修会が開催され、各寺院から代表総勢五十七名(源立寺からは十四名)が集った。

定刻、研修会は、聖道寺の東さんの司会で開始され、始めに聖道寺・高森仲道師の唱導により、全員で「諸法実相抄」の行学二道の御聖訓を奉唱。

引き続き、南近畿法華講の島田理事長(伝正院)が挨拶された後、引き続き、源立寺の細川美恵さんが登壇。細川さんは、「私が今感じている、これからの

事」と題して、主人の折伏、子供たちへの法灯相続への思いを発表された。

その後、法華寺内・藤村道監師が登壇され「大石寺を知らぬ私」と題して、師が感じた大石寺のイメージについての私見、私たちの信仰は何処にいても、どのような状況であっても大聖人の仏法、日興上人の精神を第一義に、と講演があった。

小憩の後、行道寺住職・岩島詔行師が登壇され、「自分が目にした、正信覚醒運動」題して、正信覚醒運動の淵源・経緯を、自身の幼少時から現在に至るまでを振り返って、正信会等の現在の状況について話され、もう一度原点に戻って正しい信仰を求めて精進していきたいと、話された。

さらに、伝正院・坂口麗道師が登壇され、「本来の信心について」と題して、大聖人のお言葉を素直に受け止めての信心修行が肝要であると、「千日尼御前御返事」、「本尊問答抄」、「寿量品得意抄」等の一説を引用して、南無妙法蓮華經の法を中心に、依法不依人の信仰、日興上人の精神を求め手本として信仰することが、私たちの信仰であると話された。

最後に、聖道寺住職・梁瀬明道師より、謝辞とねぎらいの言葉と、余事余念なくお題目を唱える事が得道であると挨拶があり、法華講研修会は終了し、参加者は各自家路についた。
(森)

七五三祝い

十一月二十三日・十二月四日



奥原家の皆さん

十一月二十三日と十二月四日の両日、奥原家、平田家ご両家がお詣りされ、源立寺本堂御宝前において七五三祝いをされました。

読経唱題の後、住職より御本尊頂戴の儀があり、千歳飴をいただいた後、七五三祝いについてのお話があり、記念撮影をして終了しました。

- ・箕面市 奥原幸志朗くん 五歳
- ・池田市 平田琉仁くん 五歳



平田家の皆さん

◆『恵日』発送作業と

門松等飾り付け

十二月二十七日午前十時半から、『恵日』新年号の発送作業を、また終了後の十二時頃から、門松・玄関幕等の飾り付けを行います。
お手伝いできる方は、ご参加ください。

【訃報】

〔槻木地区〕池田市
守徳院法道信士 十一月二十三日寂
俗名福田守二之霊 行年八十三歳
この度、右の方がお亡くなりになりました。謹んでご冥福をお祈りします。

案内お知らせ

『恵日』のホームページを活用しましょう

昨年開催された第50回源立寺法華講記念大会において、『恵日』ホームページの開設が発表されました。

このホームページでは、『恵日』創刊号（平成7年3月）から現在までの全号が閲覧できるほか、菅野ご住職の著作、正信覚醒運動に関する諸資料等がアップされていますので、信心向上のためぜひご利用ください。

なお、検索語は「恵日 源立寺」で検索すれば、すぐ出てきます。

ホームページアドレス：<http://the-enichi.co>

*成人式のご案内

今年の成人式（池田市の場合）は二十歳（月）の集い）は一月九日（月）午後二時より、源立寺本堂にて奉修いたします。

*役員研修会のお知らせ

一月二十二日（日）午前十時より、本年の役員研修会を行います。役員全員の参加をお願いいたします。

〔睦月詠草〕

訪れし 友が庭先 清められ

金柑あまた 電灯に映ゆ

小春日や 霧吹かけば 盆栽を

おほふがごとく 虹の現はる

〔和風〕

〔恵日俳壇〕

農作業手順記せる日記買ふ

青竹の酒廻りきてとんど果つ

初参り帰りに山へ初日の出

一年の計きまらず初詣

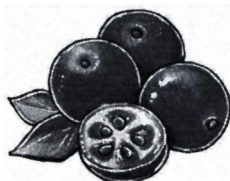
いつもただ初参りには菩提寺へ

〔農婦〕

〔森秀之〕

〔吉田裕〕

不機嫌な日やまひまひの奔放に
まだ少し眠りたらざる山桜桃
花過ぎし南円堂のうす埃





一月の行事



一日(日) 午前〇時 元朝勤行会

一日〜三日 午前十時・午後二時 正月勤行会

七日(土) 午後二時 広基寺初お講

八日(日) 午後一時 初お講・合同役員会

九日(月) 午後二時 成人式

十三日(金) 午後一時 お講

二十二日(日) 午前十時 役員研修会

※二月号の継命・恵日発送(1月末)は、
「兵庫」地区が担当です。
三月号の継命・恵日発送(2月末)は、
「槻木」地区が担当です。

令和五年度 年回表

巻	周	忌	令和四年
三	回	忌	令和三年
七	回	忌	平成二十九年
十三	回	忌	平成二十三年
十七	回	忌	平成十九年
二十三	回	忌	平成十三年
二十五	回	忌	平成十一年
二十七	回	忌	平成九年
三十三	回	忌	平成三年
三十七	回	忌	昭和六十二年
五十	回	忌	昭和四十九年

恵日

令和五年一月号 通巻三三六号
令和五年一月一日発行

編集兼 菅野憲道
発行人 菅野憲道
発行 恵日編集室

〒563-0057 池田市槻木町一〇 源立寺内

TEL (071) 751-1135

E-Mail kanno@ombat.zaq.ne.jp

購読料(含送料) 年間二〇〇〇円

〒振替 加入者名 恵日編集室会計

口座番号 0138012112649